

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ながらく遠い土地に所帯をもっていたむすこが、やっとつとめ先の都合がついて、嫁や孫たちといっしょに帰ってきてくれたとき、おばあちゃんがまず思ったことは、「やれやれ、これで冬になっても道つけをしないでむすむ」ということだった。

どんなに雪がつもっても、自分の家の前だけはちゃんと道をつけて人に不自由をかけないのが、雪国の主婦の毎朝のつとめである。おばあちゃんも若いときから、この習慣に忠実にしたがってきた。もともと、最近では、こうした不文律^①もしいにくずれだして、朝早く通る人のあしあとが自然に道をつくるのにまかせているような家もあるが、おばあちゃんもとよりそれにならうつもりはない。

しかし、なれてはいても、年をとるとさすがに冬の早起きはつらかった。だから、若い元気な嫁にその肩がわりをしてもらえることが、おばあちゃんにはなによりうれしかったのである。

そして、冬が来た。

はじめての雪の気配を、おばあちゃんは寢床の中できいた。

——まだ、踏むほどのこともあるまい。

ねまきのまま起きだして窓をのぞくと、案のじょう、雪はまだくるぶしを埋めるほどしかつもっていない。これなら嫁も踏まずにすむ、とおばあちゃんはなにがなしほっとした。

しかし、そのほっとした気持ちはいくぶん複雑であった。自分では、たとえ一日でも嫁に寒い早起きをさせないですんだことをよるこんだつもりだったが、その心の底には、たとえ一日でも、自分の仕事を嫁にゆずりわたす日がおくれたことをよるこぶ気持ちはなかったのである。

おばあちゃんは、自分が早くもしゅうとめ根性になったのかと、いさかはずかしい気がして、もう一度ふとんにもぐった。

それから三日の後、雪は腰をすえて降りだした。嫁ははやばやと起きて、ビニールかっぱのみじたくも（A）道踏みをしている。おばあちゃんはそれより早く目がさめて、ねどこの中で（B）おちつかなかった。かつては、早くむすこ一家が帰ってきてくれて、寒い朝ものうのと楽寝をすることができたらどんなにうれしかろうと思っていたのに、いざそういう身分になってみると、べつに嬉しくも楽しくもない。そればかりか、むしろいくらかうらめしいような気持ちにさえなるのは、いったいどういうわけだろう。

道踏みをすませた嫁が家へはいるのをしおに、自分も起き出して窓の外をのぞいてみたおばあちゃんは、^③思わず眉をひそめた。

道が細すぎるし、段のつけ方も大ざっぱだ。壁がしっかりたいてないから、両側からすぐくずれてくるだろう。段のかどかども、きちっときまっていない。

あれでは、もうすこし降ればたちまち役にたたなくなってしまおう……。この家の道踏みに四十年以上の年季をいれたおばあちゃん目には、若い嫁の道つけは、すこぶる要領のわるい、しまりのないものに見えた。

しかし、いますぐ直しては、嫁が気をわるくするだろう。あれでもいっしょうけんめいやってるんだもの、もんくは言うまい。そう思いながらも、おばあちゃん

んはやはり気になって、こたつにはまりこんでいても、なんとなく人の借り着をしているような気分だった。

雪はこやみもなく降りつづけて、人通りの少ない小路の道は、数時間のうちに早くも埋めつくされた。^④これ幸いである。おばあちゃんは、「じっとしてたつてたいくつだすけ……年寄りだって少しは運動しんきゃ……」などとつぶやきつぶやき、たのむようにして嫁のビニールかっぱをとりあげ、はきなれたわらぐつをつけて外へ出た。

つめたい（C）空気に顔をつつまれ、降りしきる雪のにおいをかいたとたん、おばあちゃんの背がしゃんと伸びた。自分のからだに間断なくさらさらと降りかかる雪の音をきくのが、なんともいえぬつかしい。おばあちゃんは、かんだじきのひもをひきしめて、できそこないの雪段をたんねんに踏みなおしていった。四十分ほどして、おばあちゃんは、ひと休みしながら、自分の作品を満足そうにながめわたした。スコップをくりかえし使って、しっかりとたたきかためられた雪壁。たくみな折紙細工のようにきちっと角のきまった段の切れこみ。大理石の彫刻を思わせる平らでなめらかな雪段。

「まあ、おばあちゃん、きれいだわ！　まるで芸術品みたい。」と嫁が感嘆した。

「なあに、もうひと降りすりゃ、たちまちばらこくたい（めっちゃめっちゃ）になるんだね……。」

おばあちゃんはけんそんなしてみせながら、天候しだいでたちまちあとかたのなくなってしまう雪段を、それでもなお心をこめてきざみあげずにいられない自分がふしぎだった。

しかし、考えてみれば、人間のすることは、^⑤みなそのようなものではないか。またよごれるとわかっている掃除をする。いつかは枯れると知っている花を育てる。自分はいずれ死ぬ身だからといって、一日の生をおろそかにしていいという理由はない。誰が知ってくれなくても、ただ自分の気のすむために、はた目には甲斐のないような仕事をする、それでいいのかもしれないとおばあちゃんは思った。

以来、毎朝の雪踏みは、ふたたびおばあちゃんの役目となった。嫁はしきりにすまなだったが、むすこが「あれはかあさんの道楽さ、気のすむようにしてもらえばいい」と、かたをつけた。おばあちゃんも、いまではそれをみとめている。そして、雪をおかしてやってくる来客や集金人などが、「おたくの雪段はいつもきれいになっていますねえ」と感嘆し、嫁が「ええ、おばあちゃんのおかげで……」と答えているのをかけるときは、なんともいえぬ嬉しそうな顔になるのである。

問一——線部①「不文律」とありますが、その内容を示している箇所を本文中から探し、「くこと。」という言葉に続くように四十字以内で抜き出さない。(句読点等の符号は一字に含みます。)

問二 空らん (A)、(B)、(C) に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- (A) ア まめまめしく イ そらぞらしく ウ かいがいしく エ ういういしく オ うやうやしく
(B) ア こそこそと イ どきどきと ウ たどたとと エ もじもじと オ へらへらと
(C) ア みずみずしい イ りりしい ウ ものもしい エ すがすがしい オ あわあわしい

問三——線部②「そういう身分」とありますが、嫁から見てもどのような立場ですか。わかりやすく表している言葉を本文中から五字で抜き出さない。

問四——線部③「思わず肩をひそめた」とありますが、その原因になったことは何ですか。具体的に四つ挙げなさい。

問五——線部④「これ幸いである」とありますが、おばあちゃんは何で「幸い」だと考えたのですか。その理由を五十字以内で説明しなさい。

問六——線部⑤「そのような」とありますが、それはどのようにすることですか。「くようにすること。」という言葉に続くように、本文中から七字で抜き出さない。

二 二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

平安時代の宮廷を舞台とする恋愛物語を読んでいたら、心のやりとりというのは全部歌をとどける、そのお返しをする、気に染まなかつたら歌なしでも記さず、山吹の薄葉に、カワラナデシコの花一輪だけ、使いにもたせてやる。そんなやりとりの繰り返しそのまま物語になってゆきます。そういう心のやりとりをする習慣が、その時代の文化でした。そういう習慣をささえたものは何だったかと言えば、歌を詠み、歌を送る、(A) という確かなリテラシー、読み書き能力です。

文化が習慣になるのに決定的な力となってきたものが、リテラシー、読み書き能力の確かさでした。心のやりとりの道具が、郵便、手書きの手紙、ワープロの手紙、電話、携帯電話、FAX、パソコンのメール、携帯メール、多々さまざまになったままでの、いまはどうでしょうか。そうした道具、機器は、時代のリテラシー、読み書き能力をどれだけ確かにしているかということを考えるのです。

いま、実に多様なコミュニケーションの道具、ツールをわたしたちにもたらしてきたもの、もたらしているものは、技術であり、たゆみない技術の革新から、たゆみない道具の変化がもたらされ、それがたゆみなく新しい状況を次から次にもたらしているのにもかわらず、それらのきわめてすばやい技術の展開によってひろくもたらされてきたのは、習熟の欠如です。技術を習熟することがなくなった、あるいは習熟することが必要とされなくなった。

経験知というものが、経験して知ることが大切なことでなくなった。できるかできないかは、それは道具の能力の問題であって、もうそれぞれの人の能力の問題ではなくなっていきます。そう言ってよければ、人の能力を問う必要がなくなった。そういうふうになってきています。技術というものはそういうものであり、そのことによってわたしたちがどれほど多くの便益を得てきたかは言うまでもないことなのですが、一つだけどうしてもまずいことがこのままになった。それはリテラシー、読み書き能力の無表情化、無個性化、平均化、そしてその結果としての無力化です。

携帯電話やFAXやパソコンのメールや携帯メールが、言い回しやヴォキャブラリーをゆたかにするのでなく、逆に、ニュアンスや表情をどれほど貧しくしてきたか、ということを考えます。笑うは爆笑で、(一) 顔一笑も呵呵大笑もない。わかったは了解で、合点も承知もない。頃合や時分を (B) ということなく、なにより問や問合をとることが、人と人のあいだに、いつかなくなりまして。メールなどで、すぐにあからさまな表情をもつ絵文字にたよるようになったのも、いまわたしたちのもつ言葉がそれだけ表情をなくした言葉になっていく、その渴きのせいなのかもしれません。

技術革新というものの命題は、時間を短縮するということです。ところが、リテラシー、読み書き能力というものは習得によって、習熟によって、ながく時間をかけてしか得られない、そういうきわめて日常的な性質をもっています。日々の習慣となつてはじめて得られる、そういうリテラシー、読み書き能力によって人が手に入れるのは経験と判断です。その経験と判断は、失敗や後悔のような苦い経験や間違いからみちびかれることも少なくありません。

そういうリテラシー、読み書き能力のありようについて、わたしは「ことばのダシのとるかた」という詩を書いたことがあります(詩集『食卓一期一会』晶文社)。

問三 —— 線部②「習熟することが必要とされなくなった」とありますが、どうしてですか。その理由を説明したものとして最も適切なものを次のア、エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 道具の進化で時間差なく交流できるため、誤解があってもすぐに修正できるから。
- イ 人の能力の問題が、道具の進化の問題として考えられるようになってしまったから。
- ウ 読み書きした内容が、機器にすべて保存されるので、覚えておく必要が全くないから。
- エ 手紙のやりとりをすることで恋愛を進めていくという習慣がなくなってしまったから。

問四 —— 線部③「() 顔一笑」とは、「顔をほころばせてにっこり笑うこと」という意味です。空らんに入る適切な漢字を次のア、オから一つ選び、四字熟語を完成させなさい。

- ア 序
- イ 破
- ウ 急
- エ 広
- オ 大

問五 —— 線部④「表情をなくした言葉」とありますが、そうならないためには私たちはどうしていく必要がありますか。五十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線部⑤「いつでも自分の言葉をつかかねばならない」とありますが、どうしてですか。その理由を、—— 線部⑤より後の本文中の言葉を、使用して、三十字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かたむいた家のナゾ

※¹ ヤクーツク市内は木造家屋が多いのです。見るからにシベリア原生林育ちのみごとな丸太を組んでできた家々です。ただ、^①どの家もおそろしくかたむいています。見ているわたしたちの方が平衡感覚がおかしくなってしまうそう。

※² 「ここが永久凍土地帯だからですよ」とオフロさんが説明してくれました。ヤクーツクの大地は、地表から二〇〇メートルほど下まで、地層が岩のようにコチコチに凍っています。これは一万年前の氷河期の地表がこの地域にだけ残ってしまったものなのです。

夏になると、この凍土の地表から約一・五メートルあたりまでの層がとけます。ところが冬になるとまた凍ります。このように地盤が凍ったりとけたりをくり返すうちに、建物は土台からねじれ、ひん曲がっていくのです。

ですから、どんな建物も五〇年はもたないそうです。二百年前、大黒屋光太夫たちが住んでいたかもしれない家、あるいはその当時あったかもしれない建造物をさがし出してみようと意気こんでいたわたしたちはちょっとがっかりしてしまいました。

ヤクーツクの市内では、水道、下水、給湯、暖房などのパイプがごとごとく地上八〇センチあたりにむき出しに配管されています。どのパイプも念入りに断熱材でおおわれています。人間でいえば、さしずめはわたたを全部めぐり出しているようなもので、これではどんな美しい街並みも興ざめとなります。

ただ、かたむいた家を見ていると、その理由がよくわかります。まず岩石のようにコチコチの凍土にパイプを通すのは、きわめてむずかしいばかりでなく、凍結したらパイプの修理や交換がほとんどできなくなるのです。

また、凍結と解凍をくり返す地表の近くにパイプを通すと、どのパイプもたちどころに家の土台と同じようにひん曲がってしまうでしょう。一見、ぶかっこうな、地表にむき出しとなったパイプから、^②極寒に生きる人々の執念や知恵を見る思いがするのです。

スカートをはいたビル

永久凍土という自然条件のために、ヤクーツクには高層建築を建てるなどムリだと長い間考えられてきました。それを打ち破ったのが、一九五〇年代に開発された新しい工法です。市内に四、五階建てのコンクリート住宅が目につきます。

(A)、よく見るとコンクリートの建物のどれもが、地面から二メートルぐらいの高さまで、すそのところに、ブリキ板やらベニヤ板らしいものが張りめぐらされ、なんともぶかっこうなのです。

これも新しい建築法のせいです。新しいやり方では、まず建築予定地の凍土に深さ一〇〜一六メートルの穴を、一定の間隔であけていきます。ここに長さ一二〜一八メートル、直径五〇〜一〇〇センチの鉄筋コンクリートのくいをうちこんでいきます。

くいは二メートルほど地上につき出るようにして、この上に建物の土台となる鉄筋コンクリートの板をのせます。この基礎の上に建物を築いていくわけです。(B) 建物そのものは、解凍をくり返す一・五メートルほどの厚みの地表層のえいきょうを受けずにすみませす。土台の方は、凍土に深く打ちこまれたくないしっかりと支えられています。一種の高床式建築なのです。

ただ、建物の下には、いつもこの支えの「足」がぶざまに見えていることとなります。そこでどの建物にも「足」^③かくしの「スカーツ」をはかせませす。それが建物のすそに張りめぐらされたブリキやベニヤの板だったわけです。

(C) 実際にこの新建築方式の建築現場を訪れる機会がありました。マイナス五〇度の戸外で働く労働者は、四十分間外で作業をすると、二十分暖かい屋内にもどって体を温めるといふサイクルで働いていました。

ここで現場の責任者にたずねてみました。「基礎のくいを固定するのに、どんな接着剤を使っていますか」

これに対する答えは、「なに、塩水をすき間に流しこむだけのことですよ」でした。

(D)、永久凍土の地中で、塩水はたちどころに凍って、くいをしっかり支えてくれるのです。

真冬の方が交通が便利？

「ヤクト人には、生まれてこのかた線路も列車もみたことがないような人がたくさんいますよ。何しろ国内に鉄道がないんですからね」と、オフロさんがいいました。

たしかに南部産業地帯にシベリア鉄道の支線を引いてくる計画はようやく実施にうつされたばかり。それとても永久凍土や酷暑にはばまれて、前途多難は目に見えています。

問題を解決するためには、線路が木造家屋のようにひん曲がってしまわぬよう、凍結と解凍をくり返す地表のえいきょうをうけない土台造りから始めなくてはならないのです。

同じことは自動車道路にもいえます。ほかの地域で造られるようなアスファルト道路は、一年もたたないうちにひびわれデコボコになってしまいます。

ある日、ヤクトツク郊外の道路工事の現場に行ってみました。道路予定地には深さ三メートルほどの溝がほられ、そこにジャリや砂が交互にしかれます。

道路の両側の地面から一メートルの高さに土手が造られ、その上にコンクリート、あるいはアスファルトはそうが行われます。

こうした道路を一キロ造るのに、日本円にして一億二千万円はかかるそうです。現在、ヤクト内の全自動車道の長さを合わせると二万キロ以上、ヤクトツク、モスクワ間約一・二往復のきよりになります。

「でも、そうやって気の遠くなるような努力をして造りあげた自動車道も、使えるのは一年に四カ月から八カ月間です。つまり、雪と氷にとざされた冬の間だけなのです」

とちよびり悲しそうにオフロさんは言います。

たしかに飛行機の上からヤクトの大地を見おろすと、土地の部分がが多いのか、水の部分がが多いのか迷うほどです。「ヤクトは湖と沼、河川の国ですからね」とオフロさん。

統計の数字によると、七十万九千の湖と沼、二万三千の大小の河川があります。この無数の湖沼河川は氷が張って、はじめて通ることができるのです。

「冬將軍は、川や湖に橋をかける」という古いロシアの詩の意味が、この時はじめて実感をともなって理解できたのでした。

(米原万里『マイナス50℃の世界』より)

(語注) ※1 ヤクトツク……ロシア連邦東部にある、サハ共和国の首都。

※2 ヤクト……サハ共和国の昔の呼び方。

問一 —— 線部①「どの家もおそろしくかたむいています」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問二 —— 線部②「極寒に生きる人々の執念や知恵」とありますが、「パイプ」の他にはたとえばどんなものが挙げられますか。—— 線部②よりあとの本文中から八字で抜き出しなさい。

問三 空らん(A) (D)に当てはまる言葉として最も適切なものを次のア〜オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。同じ記号は二度使えません。

ア こうして イ たしかに ウ でも エ ところで オ なるほど

問四 —— 線部③『足』かくしの「スカーツ」とありますが、「足」「スカーツ」はそれぞれ何をたどっていますか。本文中から抜き出して答えなさい。

問五 真冬の方が交通が便利なのはなぜですか。説明しなさい。

四 次の——線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 呼ばれた気がしたのは空耳だろう。
- ② 変に意固地になる。
- ③ 村のお社の赤い鳥居。
- ④ 相手を思う優しい心を仁愛という。
- ⑤ 皆から会費を徴収する。
- ⑥ 後輩の風下に立つはめになってしまった。
- ⑦ 集められた企画案は玉石混交だった。
- ⑧ 年賀状を刷る。
- ⑨ かきねで家を囲う。
- ⑩ 友人とたもとを分かち。

五 次の——線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 要求に対してカイトウをする。
- ② 結果よりカテイが大切だ。
- ③ 川の水がシンニューしてきた。
- ④ 私のセイカは長野県にある。
- ⑤ 協力タイセイを確立する。
- ⑥ 宇宙のなぞをツイキユウする。
- ⑦ 下町のセントウに集まる人びと。
- ⑧ 書道の大家にシジする。
- ⑨ セイシンセイイ客をもてなした。
- ⑩ コウメイセイダイに行動する。

